

福島原発事故から14年 までの村・福島県飯舘村の今を知る ～自然と人間の共生をめざす「ふくしま再生の会」の活動～

2025年9月30日～10月1日の日程で、LRC受講生7名が福島県飯舘村を訪問しました。飯舘村到着後、認定NPO法人ふくしま再生の会 田尾陽一理事長(84歳)より、村内を巡回しながら、飯舘村の再生に向けた活動内容と福島原発事故から14年経った村の現状についての説明を受けました。

次に、合同会社MABLINGの矢野淳代表から、「最先端の田舎づくり」に取り組む「図図(ズット)倉庫」の活動内容について説明を受けました。更に長泥復興再生拠点の視察、狼信仰の山津見神社の参拝をしたり、避難解除後に帰村した郷土料理茶屋の女将さん、畜産農家さんから事業再開及び生活再建の思いも伺いました。

1. までの村・飯舘村とは

飯舘村は福島県北東部、海沿いの浜通りと内陸の中通りを隔てる阿武隈高地の山中に位置し、福島駅から車で1時間ほどの距離にあります。基幹産業は畜産、米、高原野菜、花き(かき)栽培などの農業で、震災前から自然と共存した丁寧な生活形態の創造を目指す「までの村づくり」を推進。「日本で最も美しい村」にも選定されました。



その村が、福島原発事故で全村避難を余儀なくされます。2017年に一部地域を除き避難解除されたものの、人口は震災前の2010年6,209人から1,512人に迄減少し、高齢化率は6割と過疎化・高齢化が急激に進み、農地の営農再開率が3割ほどに留まっています。

村内を巡回した際に、里山の美しい自然を目にする一方で、村役場以外に人の気配は感じられませんでした。山林は除染されていないため、原木しいたけの栽培はできず、木を伐り薪に利用することもできないということでした。その一方で、復興政策等で震災後150人程の新規移住者が加わり、新しい彩りが芽生えはじめています。田尾理事長も2017年に夫婦で移住し、村の再生に取り組んでいます。

2. ふくしま再生の会 ～村民と協働し自然と人間の共生を目指す～



ふくしま再生の会は、物理学者でもあった田尾陽一さんのグループが震災直後から放射能汚染の調査を行うなかで、村内における農業のリーダー役であった菅野宗夫さん(再生の会・副理事長)と出会い、原発事故により破壊された生活と産業の再生を目指すことを共通の使命とし、2011年6月に設立されました。

ふくしま再生の会では、「被災地域の現場において、被災者と協働し継続的な活動を行う」ため、主に次のような活動を行っています。

- ・放射線、放射能のモニタリング
- ・除染方法の開発(住居、農地、山林)
- ・農業再生、新産業創出のためのパイロットプロジェクト
- ・被災地域における住民の健康ケア
- ・原発事故被害地域からの世界への情報発信

このうち、次の活動について各現場を見ながら説明を受けました。



1. 村内各地に設置された放射線量測定器や測定専用車などによる測定データが事務所に送信され、分析されたデータが村民に情報提供される仕組み。
2. 放射線量測定器設置小屋で、村民の栽培した農産物、林産物の放射線量の測定を逐次実施し、結果をフィードバックする仕組み。
3. 農業用ハウスで、安心して食べられるクリーン野菜の試験栽培について。
4. 環境省が一律に進めた田んぼの表土剥ぎ取りによる除染ではなく、田んぼに水をはり表層の土壌を田車を使って攪拌、テニスコートブラシで泥水を履き出し溝に溜め、干上がった後に汚染されていない土壌で覆う方法を開発について。
※この方法で除染された田んぼで栽培された米は、全袋検査で出荷可能な放射能基準値を下回り販売されています。

3. 風と土の家 ～村民憩いの場、村民と村外の人々が交流する拠点～

「風と土の家」はふくしま再生の会が中心となり、村民憩いの場、村民と村外の人々の交流の場として、2019年に建設された宿泊設備を備えた施設です。仮設住宅だったログハウスを解体移築して再デザインした建物で、里山の風景にとってもマッチしていました。



2020年には建設資材として、廃校になった小学校の廃材、ガラス戸、黒板などを再利用し、囲炉裏付き交流スペース「学び舎irori」が併設されました。インターネット環境を整備し、ここから国内外に向けて情報を発信。日本の高校生や大学生だけでなく、海外からの留学生や見学者も多数受入れているそうです。

4. 図図倉庫 ～最先端の田舎づくりを目指し、つながりを再生する秘密基地～



2021年、飯館村の地域おこし協力隊員だった松本奈々さんと田尾理事長の娘の矢野淳さんが合同会社MABLINGを設立。翌年、閉店したホームセンターを地元住民、移住者、ボランティアが協力して改修。「図図倉庫」としてオープンしました。コンセプトは「多様な人が集まり、飯館村や世界が抱える環境課題とこれからの地域環境づくりにアプローチする秘密基地」です。

倉庫に入るとまず、映画館のような巨大スクリーンが目に入ります。コワーキングスペース、イベントスペースなどを備え、環境研究を行う団体や、わさびの水耕栽培の実験を行う企業がテナントとして入居しています。また、園芸用品を販売するガーデンショップやカフェの運営、デザイン建築物の制作、飯館村を巡るツアー企画など、アーティストや研究者、学生、企業が集い、思い思いの作品やアイデアを形にして、新しい発想やプロジェクトが生まれつつあるようです。



常設展示として「環境世界を旅する」があります。サイエンスの視点で、宇宙誕生から村の歴史や暮らしまで、柔らかなタッチで描いたタペストリーが存在感を立ちます。その他にも土壌汚染状況を調べた土層の立体作品や、核分裂や放射線など原発関連の解説パネルが並びます。

特に、桐箱による放射線可視化の実験、ウラン235と原子力発電の仕組みの解説は、原発事故を根本から理解することに大変役立つ内容でした。

5. 長泥復興再生拠点 ～汚染土壌の再生利用実証事業～

環境省は中間貯蔵施設にある大量の除染廃棄物の県外最終処分の実現に向け、処分量を減らすために除去土壌の再生利用を目指しています。その足掛かりとして、2018年度から長泥復興再生拠点において、村内で発生した放射能濃度が5,000Bq/kg以下の除去土壌を再生資材化。盛土を行い、その上に覆土することで営農しやすい農地の盛土造成実証事業(計画34ha)を進めています。視察時も盛土造成作業が行われていました。



同拠点地区は2023年に避難解除され、米の試験栽培が行われています。

また、長泥コミュニティセンターが建設され、宿泊及びバーベキュー施設の併設や遊具なども整備されています。

環境省は同拠点の見学会を何度も開催して事業のPRをしているとのことですが、拠点地区の周囲の山林は放射線濃度が高く立入禁止。コミュニティセンターの施設も利用された形跡はあまり見えず、帰還者の姿は見られませんでした。

6. 山津見神社 ～狼信仰の神社、2025年12月に15年振りに例大祭を開催～

参拝時に居合わせた久米宮司から神社の歴史を伺いました。平安時代に源頼朝が白狼に導かれ、凶賊・橋墨虎を捉えたという伝説にちなんで名付けられた虎捕山が村内にあります。その中腹に山の神・大山津見神を祀る山津見神社が1051年に建立されました。麓の拝殿には白狼の像が鎮座し、狼信仰の神社として東北全土に崇敬者がいるそうです。



山津見神社は、2013年に拝殿が火事で焼失。天井に描かれていた242枚の狼の絵も焼失しましたが、絵のデジタルデータを保有していた和歌山大学のワーン特任教授、東京芸大、ふくしま再生の会が協力し、2016年に拝殿が再建。天井絵も見事に復活しました。



田尾理事長が事務局長となり、震災前には村内外から3万人を集めた例大祭を15年振りに復活させる取り組みが行われ、2025年12月に開かれることとなりました。かつての賑わいを取り戻しながら、未来に繋がる自然との向き合い方を再考していきたいとのこと。

7. きまぐれ茶屋ちえこ ～地場産の季節の食材を使った郷土料理をいただく～



9月30日の昼食は、「きまぐれ茶屋ちえこ」で、地場産の新鮮野菜を使ったごんぼっぱ餅の郷土料理と自家製どぶろくをいただきました。

女将の佐々木千栄子さん(80歳)から、農家の嫁に嫁ぎ茶屋を始めた経緯や、全村避難で強いられた知らない土地での孤立した生活の苦勞、知人の協力で古い着物のリメイクする手仕事を始め生活に張りが出てきたこと、親族の不幸、避難解除後に長男の助けを得て茶屋を再開できたこと、コロナ禍が明け全国からお客さんが来てくれるようになったこと、娘に茶屋を引き継ぐ準備を始めたことなど、紆余曲折の人生話を伺いました。

千栄子さんの厚みと張りのある手に、長年農家の嫁として、農作業から家事、育児、針仕事まで何でもこなしてきた歴史の重みを感じました。



8. 山田牧場と肉のゆーとぴあ ～飯館牛ブランドの再興を目指して～

繁殖牛を育てる山田牧場の山田猛史さんから、震災から現在までの事業継続の経緯について伺いました。震災前は、米とタバコ、ブロッコリー栽培、和牛の繁殖を自宅で手掛けていました。飯館村は畜産が盛んで、223戸の農家が和牛を飼い飯館牛ブランドで知られていました。その頭数は約3,000頭でしたが、震災後には農家の大半の方は身を切る思いで牛を手放し、村を離れました。山田さんは避難先の中島村で牛舎を借り、飯館村から連れてきた僅か3頭の牛をもとに畜産を再開。2014年秋には福島市にあった鶏舎を買って牛舎に直し、36頭を飼育するまでに至りました。



息子の豊さんは震災後、将来は飯館村で畜産を再開する前提で、食肉生産・加工に役立つ知識と技術を身に付けるため、京都の精肉店に就職。5年間修行し、2016年に福島市に戻り、山田さんと一緒に畜産を再開しました。

2017年から一部の牛を飯館村に連れてきて放牧の実証実験を開始。2018年には飯館村に牛舎を新設し、福島市から通いながら牛の世話をしました。2022年に自宅を再建し飯館村に帰村しています。



2023年、豊さんは畜舎の隣に精肉店「肉のゆーとぴあ」を開店し、飯館牛のブランド再興を目指しています。お話を伺った時点での飼育頭数は150頭(成牛64, 育成18, 肥育35, 子牛33)。「経営者は息子夫婦で、私は従業員ですよ。」と嬉しそうにお話してくださいました。

9. 宿泊体験館「きこり」(宿泊先)

宿泊先は飯館村振興公社が運営する宿泊体験館「きこり」でした。静かな森に囲まれた本館と三つのコテージには最大二十数名が宿泊可能で、本館には大浴場や岩盤浴の施設があり、三つの会議室も備えています。室内はゆったりとした作りで、窓の外には緑鮮やかな癒しの空間が広がっていました。

2年前にリニューアルオープンし、学生の研修や体験ツアーのほかビジネス目的のお客さんも多くなり利用客は着実に増えているようです。朝食には、近隣にある「カフェ753(なごみ)」から、地場食材を使ったベーグルとカボチャのポタージュを届けていただきました。どれも優しい味わいで大満足の朝食となりました。



10. 田尾理事長を囲んでの座談会 ～ふくしま再生の思いの原点を聞く～

宿泊先での夕食後は会議室に移動し、田尾理事長を囲んでの座談会を開きました。特に印象に残ったのは次のような話です。

（原発事故について）

飯館村再生の思いの根底には、田中正造の「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を荒らさず、人を殺さざるべし」という言葉があります。この定義に反し原発事故を起こした現代社会は真の文明社会ではありません。

（飯館村再生の意義）

現代社会は先進国も開発途上国も食糧問題、エネルギー問題、高齢化問題の三つに直面しています。また、コロナ禍は市場経済の発展という名目で自然資源を収奪し動植物のテリトリーを侵す開発の結果であり、人間は自然をコントロールできるとした傲慢への自然界からの警告です。福島原発事故も同様。飯館村はこうした問題に対する先進的な試みの最前線にあります。

（再生の会）

再生の会は「とにかく現地に行ってみよう、そこで考えよう」という人の集まりで、原発の是非などの政治イデオロギーや特定宗教とは無関係です。

（地域コミュニティの再生）

再生の会の協働とは、現地の村民との関係が支援・被支援という上下関係ではなく、共に学び共に働くという水平的で相互的な関係を基本スタイルとします。私も地域の寄り合いなどで意見を主張することはありますが、それを押し通すことまではせず、地元住民の意見を尊重しています。

（現代アートが再生に協業）

2019年に新潟県の越後妻有地域や瀬戸内などで、地域と人間の繋がりを取り戻す試みを続けている北川フラムさんとアーティストたちが、飯館村の再生に協業しようと視察ツアーに訪れました。アーティストとの協業は、原発事故の被害と再生の過程を見て、触って、感じてもらい、多くの人々が共有できる形で残していくことに繋がります。



<ふくしま再生の会スタディツアー 参加者の感想>

- 飯舘村はインフラ整備が終わり見た目は復興が進んだように見えますが、生活・コミュニティ再生への公助は乏しく、避難住民の帰還はあまり進んでいません。放射能汚染という重い足枷はありますが、村の再生には何より若い人が増えることが必要です。その希望の光である、図図倉庫の矢野淳さん、山田牧場の山田豊さん、きまぐれ茶屋ちえこの娘さんなどの活動支援のため、再生の会の賛助会員になりました。
(LRC4期生:Hさん)
- 以前から東北の震災や復興に興味があり、LRCに入学した時から、ふくしまスタディツアーに参加したいと思っていました。震災前の人の流れやモノの動きや環境に戻ることは、時間もかかり難しいこともある状況のなかで、地元の方の復興に対する熱心な取り組みを実際に拝見できて、よい経験になりました。経験として終わらないように、今後も復興支援やボランティア、福島産物を購入したりと、少しでも関わりを持っていたいと思っています。
(LRC4期生:Oさん)
- 林にはまだ入れないこと、木材を炭にして燃やした灰は放射能濃度が高くなってしまっているのでそれはできないこと、植物でも根っこ横に張るものと縦に深く伸びるものでも放射能の影響は違うこと、田んぼの除染方法のやり方の違い、行政や街の様子、誰が何に困っているのかということ。その他、現地に行ったからこそ知ることが出来ました。ふくしま再生の会、田尾理事長の話はとても印象的でした。田中正造のこぼさを大事にされていて、歴史はつながっているのだと感じました。
(LRC4期生:Aさん)
- 除染がまだまだ進んでいないこと、豊かな自然資源が目の前にありながら共生することができない、目に見えない放射性物質の存在に対する不安、村民の生活、人生も変えてしまったこと、しかし「被災地」というイメージを超えて、再生や地域活性化に向けて色々な取り組みが行われていることを今回知ることができました。もっと実態を広く知ってもらえるような活動の必要性を感じました。
(LRC4期生:Uさん)
- メディアのニュースを観る限り、福島の復興はかなり進んだように感じていました。が、実際に現地に行ってみると、再生への道はまだまだ遠く厳しいと感じました。一見きれいに整備された町にも、あらゆる所に放射線量測定器が設置され、一歩すぐ先に見える林には立ち入れず除染が進んでいないこと等、震災後15年経った今なお、復興への道はまだほんの半ばであるという現実を目の当たりにしました。また、国が「復興の象徴」として作った公園や立派なコミュニティーセンターも見学しましたが、現地の方達が利用した痕跡はほとんど無く、きれいなままの状態、国が進める復興と現地の方達が望む復興のカタチには、時に大きな乖離が生まれていることも感じました。今回の経験を大切に、福島再生のために自分に何が出来るか問い続け、行動を起こし、福島再生に関わり続けていきたいと思っています。
(LRC4期生:Sさん)

<以上>